

# 岩屋山 観音たより

発行所：和歌山県

海草郡下津町橋本一〇六五  
福勝寺内

電話 (073) 494-1031  
編集人：本多碩峯

修行僧・同行二人 本多碩峯

## 二十一世紀は生きがいの創造(三)



弘法大師像

重文 京都 東寺蔵  
正和2年(1313)に東寺西院に  
施入された談義の本尊  
字は御宇多天皇の宸筆

我が国の歴史的な大天才は紫式部と弘法大師である。湯川秀樹博士がいつも語っていたのですが、日本では創造的な仕事をされる人が少ない環境であるともいい、創造性とは天才と独創性とも同じでないと、もっています。

さらに、もっと大きく考えて、宇宙の中に生命が顕れ、そして進化して人間というものが出現し、人間がいろんなことをして至っているということ自身、非常に大きな創造力が、いろんな形であらわれている姿だということでもある。

そういう大きな宇宙の背景の中で、この地球上で一番明確に顕れているのが人間の「生きゆく」ということだともいっています。つまり人間の生命力を、生命力とは人間だけではないのです。宇宙の大生命力という一つの顕れです。

弘法大師講本部・四国六番安楽寺  
住職・畠田秀峰師書



真理の花たば

『法水汲んで尽くこと無し』  
仏の教えは深いので汲んでも汲んでも汲み尽くせない。  
今の自分の理解ですべてと思っ  
てはいけない。

### 明日への装を提案します!

寝装・和装・洋装・総合繊維卸

株式会社 **マスメン**

代表取締役 増田都司夫

本社

〒640-8376 和歌山市新中通2丁目8

TEL (073)424-4466(代表) FAX (073)436-6508

### 豊かなまちづくりに参加します!

株式会社 **田淵建築設計事務所**

代表取締役木田耕蔵

本社

〒640-8287 和歌山市築港4丁目2-1

TEL(073)431-0261(代表) FAX(073)431-3898

顕れ方は人それぞれ素質あり、環境あり、運不運もありませう。

### ハンセン病患者の人間解放

本日(五月二十三日)久方ぶりに素晴らしい政治ニュースをテレビで拝聴する。「観音たより」では政治を取り上げることが拒んで来たが、今回の小泉首相の「ハンセン病訴訟控訴断念」の英断は正に人間の生命力の最高の創造性であります。

元患者たち、そのご家族の長年の苦しみは「生きゆく」権利を奪われた言葉で表現できない、想像を絶する苦しみを通して、人間として考えさせられるのです。

実は父の従兄弟、故保田 耕氏がハンセン病研究のため国立ライ療養所長・奄美和光園長を拝命患者の治療研究に専念、でも陸軍に患者に見送られ招集、昭和十八年中国で戦死と遂げた。遺族(保田暁子)から「人間解放」の感動の喜びを電話で受けました。

それぞれ元患者たちが老齢と後遺症の中で親族と切り離され、社会から隔離された永い人生、これからの人生を正に「生きゆく創造性」を発現して頂きたく衷心より祈念申し上げます。

皆さんのそれぞれの豊かな個性や趣味を通して創造性を顕現されますことをご期待申し上げます。

その努力が実ることは素晴らしいですが、成功、失敗如何に関わらずそのような努力の中に生きがいというものがあるとする、湯川秀樹博士も語っています。

ハンセン病患者の人間の生命力「生きゆく力」を無惨に奪い去っていたのです。

残り少ない人生であるかも知れませんが、今回の裁判と政治判断を勝ち取ったことが元患者自身の最高の創造性を発現されたことと申し上げたい。

生きがいというものは運が良かったということでもなく、成功者だけに限るものでもない。人生というものは生きがいというものは自分が何かをやりたいと思っているけれども、必ず成功するという保証がない、失敗するかもしれない、成功するかもしれない。つまり可能性として、われわれはそれを考えることはできるけれども、しかし必ず成功するという保障がないところがあるから、そこにいきがいがある。もしもどっちかに決まっておいたら、人生というものは何ということもない。宿命論でいうように人間の運命というものは一つに決まっているとは考えられない、失敗するとも決まっていな、成功するとも決まっていな。だからこそ、そこに生きがいがある。病人や障害者や老人や今回のような制度による苦しんでいる人々への活動も貴い人間生きがいの創造性であることを学ばせて頂きました。

### 賀川豊彦と稲森和夫(二)



稲森和夫：近影

全社員の幸せの為に最善を尽くす稲森和夫は著書「敬天愛人」に経営者自身が明日のことでもわからない。それにもかかわらず、従業員は何年も先までの待遇改善を期待し、家族まで含めた将来にわたる保証を会社に求めているというところを、この事件によりはじめて知った。そのとき稲森氏は「とんでもないことを始めてしまった」とつくづく思った。そこだ初めて企業を経営するということとは、じぶんの夢を実現するということではなく、現在はもちろん将来にわたっても従業員やその家族の生活を守っていくということである。このことに気がついたのである。この経験から稲森は経営とは経営者が持てる全能力を傾けて、従業員が幸福になれるように最善を尽くすことであり経営者の私心を離れた大義名分を企業は持たなくてはいけないという教訓を得ることができた。と言っています。稲森氏の素晴らしい経営哲学がある。

ふた味、ふた味、みつやの味。



大切な法事料理は  
経験豊富な三都家におまかせ下さい!

お昼は日替わり献立  
で皆様をお待ち  
しています!

〒640-8393  
和歌山県和歌山市畑屋敷端ノ丁24  
TEL(073)423-3355 FAX(073)422-4522



皆さんのスーパー  
株式会社 みち屋

代表取締役 道畑 勇

本 部 和歌山市岩橋729番地の6  
TEL (073) 473-4197  
松 島 店 和歌山市加納246番地の1  
TEL (073) 474 - 3500  
貴志川店 那賀郡貴志川町大字北山517番地  
TEL (0736) 64-7020

更に「哲学への回帰」の著書にレイモンドチャンドラーというアメリカの作家の著書の主人公の言葉に「男は強くなければ生きていけない。しかし、優しなくては生きていけない。」「努力して強くなったのはいいとしても、弱いものを思いやる心がなければ、人間としての魅力に欠ける。弱いものには手を貸し、たとえば困っている人がいたら自分のことは後回しにしてでもすぐに助けてあげる。そのような優しさが大切なのです。その優しさ思いやりがないことを、「利己的」というので、と、はつきりと語っています。

**仏教経営者**

私は稲森和夫氏を「仏教経営者」と位置づける。稲森氏は更に次の問い、企業は何のためにあるのか、に対して「そもそも企業は何のためにあるのでしょうか。人々がいい製品を買うの、つまり企業活動はただ儲けるためのものではなく、社会に効用を提供しているのです。言い換えれば、企業は利益を追求する中で社会的な任務を果たしているのです。そういう会社の持つ役割 意味を社員の意識に徹底的に植え付けることは、重要な社員教育です。従って社員も社会を構成する一員です。

もし、道徳を家庭でも教わらず、学校でも教わらず、その上、会社でも

教わらないとすれば、人間には道徳などが必要なく「会社というのはただ儲ければいいものだ」と思い込んでしまうのも無理はありません。会社がただの営利団体でないことを徹底すれば、倫理的にやってはならないことがあるという判断も出てくるはずですが、会社が自己倫理を持って、社員に対しても倫理的行動となったら、社員に対して倫理を要求するのは不可能です。

われわれの普段の生活の中にある「倫理の基本にあるもの」は、「自利利他」ということだと思えます。菩薩道という表現を使えば大変難しいことのように思いますが、自利利他といえは、普通の人間のやっていることです。他人に利益を与えることが自分にも喜びであり、楽しみでもあるということです。

それは労働がそうです。人間が働くのは自分が食べるためです。しかし、いたっていい場合はただそれだけではありません。それはまず家族を養うためであり、そして会社をよくするためであり、国を豊かにするためです。労働には何重かに利他行が含まれているのです。そして時には人間は自利より利他を優先させることがあります。

**経営者も従業員も**

**両親である顧客の子供である**

稲森氏の哲学が「自利利他」にあります。彼の企業経営には経営者も従業員も一つの家族の兄弟である。顧客である社

会は企業という家族の両親であると解釈できる。兄弟が創意工夫の商品を「懺悔と感謝」心を以て両親である顧客に提供する。私自身がそうです。今日、日々生かされている証は今も亡き両親のお陰です。

企業においても、経営環境がどんなに悪くとも、生かされている企業は顧客である両親のお陰なのです。

**聖徳太子の十七条憲法**

推古十一年(六〇五)太子三十一才の時制定されたこの憲法が今日、平成の時代にとっても非常に大切で重要な意味を持っていると考えるのです。

日本国家は勿論、地域社会、企業社会、家庭に企業内とりまして、この憲法の思想を再考する。特に第一条が重要であります。

第一条「和をもって貴しとし、忤(さ)から(う)ことなきを宗(むね)とせよ。人みな党(たむら)あり。また達(さと)れる者少なし。ここをもつて、あるいは君父に順(したが)わず。また隣里(りんり)に違(たが)う。しかれども、上和ぎ、下睦(むつ)びて、事を論(あげつら)うに諧(かな)うときは、事理おのずから通ず。何事か成らざらん。」

稲森和夫氏経営思想にはアメリカ企業社会の実力競争の実力主義が絶対でなくその原点に「和」「仲良く」という思想がある。社員一人一人が専門も実力も個性も異なる集団です。これらの異なった一人一人の

特性を寧ろ大切にしながら人間の生きがいを求めて働くためには「和」すなわち経営者を含む社員である兄弟・姉妹が「仲良く」すること、その為には忤(さ)はいけない、反抗してはいけない、即ち辛抱し合つのが兄弟・姉妹であるのです。

「人みな党あり、また達(さと)れる者少なし」とは不和の原因と以下その結果を言っているのです。党とは集団をいふのですが、集団があるところには集団のエゴイズムがある。集団にも個と全の調和が本来求めるところですが、不調和のところは「和」が存在しない。

稲森和夫氏自身が経営者として「自利利他」の菩薩道を出家修行され、集団的エゴイズムをよく知り得た所以である。今日でも人間のエゴイズムで行動するといわれ、金銭、権力、名誉、異性等の欲望以外は集団的エゴイズムで説明できる。

一昔前は労働組合、昨今では新興宗教団体でその内部において個人に忠誠を誓わせ、ある種の道徳を強要し、外部には抑制のないエゴイズムがそのまま通用し、その集団はひとつの世界観を強要する。その世界観はいつも歪んだ眼鏡なのです。その集団の利益という歪みがある眼鏡に仕かけられていて、その眼鏡を通して世界をみる人は、その歪みに全くといっていいほど気付いていないのです。「達(さと)れる者」

(4)

とは集团的エゴイズムの悪をさ  
とつて、それを超越した仏教的思  
想の人をいう。

梅原猛氏はいう、『人間は存在に  
執する。自己あるいは集団、そうい  
う存在に執することによって偏見  
がうまれる。そういう執を離れて  
ものをみよ。そうすればものの真  
理(実相)が現れ、そのような執か  
ら人間は超越することができる。  
ブッダはまさにそういう人である。  
仏典によれば、かかる意味で「達  
者」とはブッダを意味する』と。

労働組合は本来経営側と対立と矛  
盾をこえた絶対の一に立脚して、  
この千変万化する現象界に自由自  
在に応ずる、「一即多、多即一」、  
「一切仏」を説く、「華嚴經」の壮大  
で莊嚴な思想が大切と考えられる。  
この思想が次の「君父に順わず、隣  
里に違つ」にも通ずる。次の「しか  
れども、上和ぎ、下睦びて、事を  
論つに諧つときは、おのずから通  
ず。何事か成らざらん」は「和」の  
状況の実践的利益について述べた  
ものであります。非常に大切な事  
で、「和」が最高の徳であるとすれ  
ば、和を実現することが何よりも  
大切であります。もし、和を積極的  
に実現できなかったならば、せめ  
いで消極的に実現しなくてはならな  
い。そのためには「性」さから(つて

はいけない。反抗してはいけないとい  
うのであります。

ここで事を論うに諧うとある言  
葉は太子は和の状況について論じてい  
るのです。上下、君臣が和睦して、和氣  
あいあいのうちに事を論じてゆく、そ  
うすれば企業集団はうまく運営される。  
それが和の状況であります。太子は、こ  
こで民主的会議の精神をすすめている  
のです。大きな事を決めるには出来る  
だけ多くの社員と論らう事をすすめて  
いるのです。和がないと議論が十分に  
行われぬ。議論が十分におこなわれ  
ないと、間違いが生じやすい。和の徳は  
智の徳とつながっているのです。

**少欲知足**

企業経営にとつての『和』とは平安に  
実存する事でありませう。経営企画に「少  
欲知足」の経営思想が生き甲斐ある創造  
から創意工夫が生み出される。

人間の弛まない欲望を少し小さく今  
生かされている充実を知ることが大切な  
のです。経営者のゼロ経営思想が実は大  
きな利潤を生み出す原点ではないでしょ  
うか。(知足)少欲(価値)  
「観音經」の三毒難は、人間の内面的  
欲望である淫欲、瞋恚(いかり)、愚痴  
(おろかさ)の三つの欲望を、慈悲、勇  
猛心、智慧に転換させる方法を説いてい  
るのであります。

貧(とん)・瞋(じん)・痴(ち)を三  
毒といひ、この三つの悪心を毒と呼ぶ

のは、これがはたらくと、われわれの心  
は死に至るからです。

仏典の「遺教經」の中に、こうした欲  
心について次のようなことがありま  
す。  
多欲の人は利を求むること多きが故  
に苦惱もまた多し。少欲の人は無求無  
欲なれば、すなわちこの患うれいな  
し……少欲を行ずる者は心すなわ  
ち坦然たんぜんとして憂畏(うれい)  
するところなし。事に触れて余りあり、  
常に足らざることなし。

貪(むさぼ)りの心の大きい人は、利  
益の追求のみに生きるために、苦惱もま  
た多く、少欲の人には苦惱が少ない。少  
欲の人は多くを求めず常に満足してい  
るのである。『遺教經』はこの「知足」を次  
のように説いております。

汝等(なんじら)比丘(びく)もし  
もろもろの苦惱を脱せんと浴せばま  
さに知足を觀かんずべし。不知足の  
者は富めりと雖(いえど)もしかも貧  
し。知足の人は貧しと雖もしかも富め  
り。不知足の者は常に五欲のためにひ  
かれて、知足の者のために憐憫れんみ  
ん(さら)る。これを知足と名く。

むさぼりの苦惱から逃れるために欲望  
を制御すること(少欲)と足ることを知



第1章 「地上最深の谷間  
第2章 天然のマンダラの中へ  
第3章 王城の四日間  
第4章 カリ・ガンダキ河畔に還  
第5章 百泉の流れるところ

松井 亮【写真】  
奥山直司(高野山大学助教授)【文】

B6判 販売価額 ¥2,800円【税別】  
中央公論社出版

文化財調査のため訪れた、この「ヒマラヤ最後の禁断の王国」の魅力と自然との融和の中に生きる人びとを、101点のカラー写真とともに余すところなく紹介した、わが国初のムスタン入門書。

(5)

ること(知足)が必要である。欲望の無制限の追求は、人を欲求不満の奴隷にしてみようのです。

『老子』モ中二、

足る事を知れば辱(はずか)しめられず。(「立戒」第四十四章)

ということばがある。満足を知っていれば決して過ちを犯さず、過ちがなければ恥辱(ちじょく)を受けないこともないのだということだ。また老子には「止(とどまる)を知るは殆(あや)つからず」という同じようなことばがある。

### 諸法実相

古歌に、

おもしろや散るもみじ葉も

咲く花もおのずからなる

法のみすがた

とありますが、春めぐりければ花が咲き、秋になれば木の葉が紅葉する。その自然のありようが、法のみすがた、つまり諸法実相だといっています。

私なりに皆さん自身皆さんの企業をあるがままに観照することが非常に大切なことと考えます。

道元禪師は「眼横鼻直(げんのうびちやく)と言った。わたしたちの顔には、眼は横についているし鼻は縦についている。ものが如法についていること、それが諸法の実相である。

また、一休禪師につきのような逸話(いつわ)がある。

あるとき、一休禪師がくねくねと曲がった松の前で、旅人に呼びかけ「この松をまつすべに見た人にはほつびをあげよう」と言ったところ、まわりに集まった人たちが、曲がりくねったその松を下から見たり、横から見たりして、何とかまつすべに見ようとした。しかし曲がりくねった松はどこから見ても曲がっている。やがて一人の男が「この松は本当に曲がりくねっているなあ」とつぶやいた。一休禪師はさすが、「おまえこそ本当にこの松をまつすべに見た」と言って褒美(ほうび)を与えたそうです。ありのままに見ることが諸法実相であります。

諸法実相とは別のことばで言えば、ものの本当の姿ということであり、これがなかなか私たちには見えなものです。それを本当に見ることができるのは仏であり、観世音菩薩であり、すぐれた智慧をそなえた覚者だけである。私たち凡人はものの本当の姿を見ないで、いつも色めがねをかけてものを見ている。色めがねとは、いわばわれわれの目の分別であり、そのままのものを見ないで、区別したり、比較したりしては、喜怒哀楽(きどあいらく)のとりこになり、ますます目を曇らせ、実相を見失っている。

かつて有吉佐和子さんの小説「恍惚の人」が話題になった。すっかり惚(ぼ)けてしまって、大小便の始末もできなくなってしまう老人が描かれている。その姿に自分の人生の末路を想像して、慄然(りつぜん)とした方も多いと思う。しかし、そんなになってもまだ生きていくというのも諸法の実相であります。人間一生、うまれてから死ぬまで、生老病死の諸法の実相を歩んでいるのであります。生まれたばかりの赤ん坊が、目に見えない、からだも一人で動かさなくても、母親にだかれればその乳房にピタリ吸いつく。これも諸法の実相なら、恍惚の人となつて、口もきけない、からだもきかない、寝たきりになつても、まだ物を食べ、排泄(はいせつ)して生きていくのも諸法の実相であります。

このように「ありのままの姿」が実相であり、それを「妙法」ともいう。妙法は宇宙の森羅万象に顕現しているのであります。

### 和魂洋才

稲森和夫すなわち稲森大和禪師は企業を取り巻く環境を「ありのまま」実相を見ていられるのではないのでしょうか。

一九八〇年代半ばから円高、ドル安を背景にアメリカを中心に海外投資が盛んになった。「結局は撤退した」というような例が大変多い。金融機関は事務所を閉鎖し、不動産投資も高額で入手した物件を安価に手放すことになった。製造業でも現地生産を始めた。米国の企業を買収を図ったが、現在順調に経営しているところは少ない。日本の対米直接投資の減少からも明らかによつて、日本の経営者は海外事業経営に自信を失っている。

### 日本と欧米 異なる文化

日本人が海外で事業を行い成功させることが難しいのは日本と欧米の「文化」の違いに起因すると思われる。日本は有史以来、世界でもまれに見るほど平和な歴史をたどってきた一方、欧州では国家や民族が存亡をかけた戦いを繰り返してきた。このような歴史の違いが固有の「文化」を否み、ビジネスの世界では経営スタイルに大きな差をもたらした。

欧米式では海外でも自国と同様トップダウン方式で「ピラミッド型」の徹底的な支配構造をとる。日本の場合海外で経営トップを変えても、組織運営はマイルド(温和)で、権限と責任体制も明確でなく、すべての事柄が話し合いや根回しで決める。また、欧米では異民族、異文化の中で

の仕事標準化するために「マネジメント・システム」を確立した。日本人が海外ビジネスを始めたときに、このシステムを安易に用いようとしたが、平和な農耕民族の日本人が民族や国家衰亡の危機感の中で鍛え抜かれた欧米流のシステムを形だけ取り入れても中途半端なものにしかならない。これが日本企業による「国境を越えた経営」を難しくしている根本原因ではないか。日本的でも欧米流でもないどっちつかずの経営を行ったために海外においてなかなか事業を進められないのだ。

日本の精神性を表す誠実、正真、貞撃(しんじ)、謙虚、感謝、慈愛などの言葉は実は洋の東西を問わず、人間が最も大切にすべき規範となつてゐる。とすれば、世界のどこでも通用する普遍的な人間のあるべき姿を表すもので、倫理観は現在のビジネス世界でも求められているものだろう。それゆえ、日本人が海外で事業を行うとき、日本文化が培ってきた日本人の精神性、倫理観を自信を持って前面に押し出すべきだと思ふ。現地の実情に即し、学ぶべきものは学び、真の意味での「和魂洋才」を実現できれば、日本人の経営は必ず国境を越えることができるはずだ。

**成功望めない どっちつかず**

ところが大抵の日本企業が米国に出ると、「アメリカ式の経営をしたい」と頭では考えても、結局のところ本社とのコミュニケーションを考えてトップは日本人を持つてくるといふような行動をとる。そこからしてもう徹底した米国型経営などはできないわけだ。こうしたどっちつかずの態度ではうまくいくわけがない。

稲森氏が米国で経験した例を二つほど紹介している。最初は京セラグループの北米統括会社。米国市場に販路を求めた六九年、販売拠点として設立した。米国ビジネスの慣例や手法の中で取り入れるべきものは積極的に取り入れ、人間として普遍的に正しいと思われる精神性や倫理観を大切にしながら経営に努めた。経営トップ層のモチベーションとなるように幹部層の給与ベースを高めるなど、欧米流の給与体系を採用する半面、日本のように社長以下、全従業員に賞与を毎年支給し、全員で喜びを分かち合うことをしてきた。

この統括会社の現在の社長はすでに就任以来十四年を経過した。七九年に入してから二十二年在籍している。また、統括会社傘下の米国子会社の社長は全員米国人で、この会社でたき上げ、昇進してきた者はかりだ。もう一つは十年ほど前に買収した電子の例だ。

買収合意の後、株式交換レートを再三にわたりその会社が有利になるように変更を求められたが、最大限譲歩しても事業を成功させることができると判断し、すべて応じた。また会社名も経営陣も一切変更することをしなかった。結果は、最初からすばらしいコミュニケーションのもとに、一つの企業グループとしてスタートを切ることができた。

この全社は買収後、五年足らずでニューヨーク証券取引所への再上場を果たした。二〇〇〇年度の売上高は合併前と比べて四倍の十六億ドル、利益は十二倍の約二億五千万ドルに拡大した。再上場は京セラにとり約二千五百億円を含み益をもたらした。

**謙虚さと自信**

**両立が重要**

二十一世紀に本当にグローバルに通用する創造的な経営とは、合理的で高度にシステム化されることは当然として、そのベースは人類が共通して持つ精神性や倫理観に根ざすべきだと考える。その意味では、日本企業は謙虚に学ぶ姿勢を持ちつつ、自信を持ってその信ずる道を歩むべきである、と結んだ。

昨今、国内の企業の中には、例えば高収益を上げていくスーパーマーケットでも個人の實力に期待する傾向から「和」を尊ぶ評価方法に変えられ、店の成績に依り店長を含む全社員に賞与を与えること

**現在に生きる聖徳太子の仏教**



聖徳太子は混乱した当時の世相・人心の指導の当たつて、仏教に注目し、自ら深く皈依されました。これが太子の十七条憲法に反映されました。すなわち第一条には「和」ということを提示されたのです。第二条に篤く三宝に敬うべきことを述べられました。

仏教への皈依と和の精神を把握された太子は法華哲学の諸法実相論を深められ、造詣を發揮されました。

諸法実相論というのは、社会現象としての一切諸法はみな実相真如のあらわれである、ということなのです。今日の経済産業界の繁栄・衰退・倒産の現象は永久に差別的にのみ存在するものとして認識されるものではない。差別そのままに、また差別を超越して、同一無碍(むげ)の実相として存在し、私たちも含む聖徳太子は、「法華義疏」のはじめに「萬善同歸」という語によって、諸法実相を説かれている。



光明曼陀羅  
利他行相

人間の日常におけるすべての行動は、それが個人個人に属している間は、優劣美醜など干差萬別である。だが差別的認識が仏の境界に帰入すると、何れも等しく区別無く否定され、社会の現象は一法をも飽かさず真理(実相)のものとして存在する。

澤木興道禪師は「得は迷い、損は悟り」と言い、内山興正禪師は「スマシはスマシの花を咲かせ、バラはバラの花を咲かせることが大切。それは結局、自己の人生の花を咲かせることで」と教えて頂いております。

明治維新後の日本に於いて、この太子の精神を忘れ、精神的支柱を失った民族の混乱のみが、現代日本へと続いてきた。

しかし、私には、近頃、太子精神の復興が叫ばれているように感じられます。

この『和』の仏教が混乱した現代精神に光明をもたらし、我が国をひいては世界の情勢を導くものであると思えます。

### E・F シューマツハーの仏教経済学(一)



E.F.シューマツハー

十数年前「軽薄短小」という言葉がはやり、性能の良い小型の商品がもてはやされました。その語源がシューマツハーの著書「スモール イズ ビューティフル」からだ

そうです。一昨年この本を幸運にも拜読の機会を得た。この機会に彼の仏教経済学を考察させていただきます。

簡単に彼のプロフィールを紹介ししますと「Ernst Friedrich Schumacher」一九一一年ボンに生まれの経済学者。オックスフォード大学に学ぶ。戦後英国に帰化。英国石炭公社顧問として早くから石油危機を予言した。一九七七年没。

#### 一つの時代の終焉

という書き出しを紹介しますが、正に諸法実相あるがままに観照する事の大切さを彼自身の体験をこの様に語っています。

『私がノーサンプトンシャー州で農業労働者として働いていた時に学んだ教訓がある。当時、毎朝食前の私の仕事の一つは、丘に登って近くの牧場に行き、牛の数を教える事であった。』

そこで、私は半分眠りながらそこよる登り、三十二頭を数えてから丘を下って農場に戻り、監督に敬礼して「ハイ。三十二頭でした」と報告すると、彼は「朝食をとれ」というのだった。ある日、丘に着くと、ゲートに立っていた年寄りの農夫が「おい、あんたはここで毎朝なにしているのかね」と聞く。私は「たいしたことではありません。ただ頭数を数えているのです」と答えた。彼は頭を横に振り「毎日頭数なんか数えていたら、牛は増えないよ」といった。そこで、私は「この田舎者！何をつまらぬことを考えているのか」と独り言を呟(つぶや)きながら帰っていった。というのは、自分がプロの統計家で、農夫はそのことを知らないということだった。ある日、私はそこへ登って数えた。何度も何度も数えたのだが、三十一頭しかない。朝食をとろうと丘を下って監督に「三十一頭しかいません」と報告した。監督は非常に腹をたてて、「朝食をとれ」といったら二人でいつてみよう」といった。でかけてその場所を調べてみると、茂みの下に頭が死んでいた。私は「待てよ、毎朝毎朝ここへ来て数勘定をしてきたのはなんのためだったのだろう。そんなことをしても牛の死ぬのは防げなかったではないか。もしかしたら、あの年寄りの農夫は私が見落とした点をつかんでいたのだ」と独りごちた。おそらく彼は表現がへたで「毎日頭数



有限会社 **ミヤタケ**  
代表取締役 **宮下隆博**

〒640-8329  
和歌山市田中町4-119  
TEL(073)422-2327 FAX(073)436-5598



人に優しい音声発生装置!

有限会社 **日本メディテックス**  
代表取締役 **山口昭昌**

〒641-0054  
和歌山市塩屋5丁目5番43号  
TEL(073)446-2009 FAX(073)446-3696

なんか数えていたら、牛は増えないよ」といった。彼がいおうとしたのは、もし牛の量(数)に心を集中する訓練を積むと、牛が死ぬのを止められないということだった。量にどんな意味があるのだろうか。私が数えなかつたら、どうなっていたのだろうか。一頭の牛がまよいごになつたかもしれないが、誰かが連れ戻していただろう。私は質の要素を探るべきであり、すべての牛が健康かどうか、毛につやがあるかどうかなどを見とどけるべきだった。監督のところへ帰って、「ああ、みんな大丈夫でしょうが、ただ一頭少し汚れたのがいました」と報告できただろう。そうすれば、二人で丘に登り、何か手を打つことが出来ただろう。量が私を圧倒して心を占領し、本当の問題である質を忘れられてしまったのです。」

本来統計学者である彼が実際の体験され彼が没して二十四年なる現在、経済、農業、福祉あらゆる面で統計学を応用し、先進国が大変な犯していることに気付いていない。旧約聖書で最初の数の過ち、人口調査を導入したのがダビデ王であることを王自身が間違いを悟のです。

仏教では「般若心経」に色即是空・空即是色と説かれています。中国思想史の老子の「一から二が出て二から三が出て三から万物がでる」というような生成論の立場を仏教ではとらない。そこがどこから出てきて成立したかという生成論の問題は、仏教の関心事でない。仏教ではどこまでも、現に存在しているものが、どのような条件で存在しているのか、ということを明らかにするのみであります。

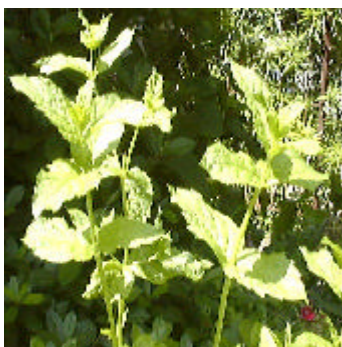
「森羅(しんら)」という言葉があるが、森羅万象とは現象である。真如が森羅万象に内在している、真如即森羅万象という考え方です。真如を本体と考えるのは語弊があつてまずいが、いちおう、西洋哲学の概念を使うと、現象即本体ということが終教(じつぎょう)の立場である。万法即真如、現象即本体、これが終教の立場なのです。

『終教』：仮のものではない真実をそのままに語った教え。  
森羅万象のほかに真如があるのでなく、森羅万象のなかに真如を見る。森羅万象を離れて、真如というのが形而上学的実体としてあるのではない。  
『形而上』：精神や本体など、形がなく通常の事物や現象のような感覚的経験を越えたもの。  
これがヨーロッパ哲学とちがうところで、現象即本体という言葉はあまり好ましくないというのはそういう意味

であります。あるのは森羅万象だけで、森羅万象を成り立たしめている理法、それを真如と名付けたわけです。真如という何か形而上学的な存在があつて、それが森羅万象のなかにあらわれているという意味であります。

真如というのは「そのまま」ということで、あるものがあるがままあること、諸法実相と同じことであつて、森羅万象のなかには諸法実相の道理が貫徹しているわけです。

たとえば、春に花が咲き、そして秋には紅葉になる、これもまさに真如であります。真如とはあるものがあるということと、しかも如法である、真理のごとくにあるということである。竹がまっすぐに生えているのが竹の真如であり、松はなんとなく曲がりくねっているのが真如である。真如とは本当の相(すがた)ということでもあります。



境内に生えるペパーミント

短歌

庭よ摘むペパーミントの

茶よりたつ

さやけき香りの

すがしさに酔ふ

若葉萌ゆる古刹の

昼の寂かにて

山の樹々揺る

風渡るのみ

和歌山県那賀郡 谷澤規佐子作

和歌山県・書道県展審査委員 小澤清湖

先生の門下生、小生の先輩。

今年の春に門下生一同がご来寺、皆さん、山菜料理に和やかに団欒の節に作つて頂いた短歌。

短冊に書かれた詩です。お見せできないのが残念。谷澤さんの優しさで自然との共生が素晴らしい。

小澤門下生有志の誌上発表会を試みたいものです。

編集後記

稲森大和禅師(和夫)は、お釈迦様が教えてくれている、足を知る」ということをもつ我々人類がそろそろ思い出してもいいときではなからつかと思つ、と訴えられています。

恩師関谷先生からプリンター用紙のご惠贈頂きいつもながら感謝いたします。

高野山大学院で法身説法の研究「原始仏教から小乗仏教大乗仏教へ」といよいよ密教の法身に進んできました。

秋になりますと護摩供養の修行に高野山へ登ります。

合掌